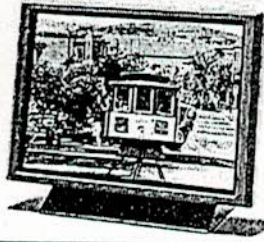


富士通

カラーPDP市場を開拓

94年度までに量産体制



富士通（社長・関沢義氏）は、カラーPDP（プラスチックディスプレイ）の

真の本格的な市場開拓に乗り出す。二十一日からテレビモニターや交通情報表示機器メーカーなどに販売攻勢をかけ、初年度六千台の受注を目指す。当初受注量に応じた生産をするが、九四年度までに月間三千台の量産体制を確立する。カラーPDPは、平面パネルながら二〇インチ以上の大型化が可能な次世代の表示装置

で、現在富士通一社が商品化に成功。今年一月のサンプル出荷以来、マルチメディアを含む多分野から引き合いが殺到していた。本格投入するカラーPDPは、有効表示対角が二〇インチのパネルにRGB各六十階調制御によって二十六万色を表示できる。厚さは三三ミリと平面状で、白色ピーク輝度は一平方センチ

メートル一五〇cd、視野角一四〇度以上とCRT（ブラウン管）に匹敵する表示性能を持つ。これまでサンベースで社内関連ユースを中心に出荷してきたが、他社からのニーズも五十件規模にのぼっていることから量産に踏み切ることにした。具体的なニーズには、テレビモニターや交通表示のほか、

F A分野、金融機関における情報掲示板などがあるという。同社では今後、多様なニーズに対応するとともに、半導体の販売ルートを活用し当面国内のユーザー開拓を進める方針だ。生産は明石工場（兵庫県）が担当。ライン立ち上げ期の今年度中は、受注数に合わせた形で生産するが、九四年度からは本格的な量産体制をとる。価格は、今年度中が五十台未満の購入の場合で一台六十万

円、九四年度以降はさらに低価格化を図る。カラーPDPは現在、TFT（薄膜トランジスタ）方式LCD（液晶ディスプレイ）と並ぶ次世代の表示装置として本命視されている。TFT・LCDでは難しい二〇インチ以上の大型化も可能のため、マルチメディア分野でもその応用が期待され、NECや沖電気工業などは、今年度中が五十台未満の購入の場合で一台六十万